

# 相談支援つうしん

<第 64 号>2020 年 9 月 20 日  
県立湘南養護学校 支援連携部  
相談支援係 ~教師編~

## ~校内の風景~

### ★投票して、多数決でお楽しみ♪の活動を決めよう

小学部で投票による多数決で物事を決める体験をしていましたのでご紹介します。小学部の朝の会や帰りの会では、お楽しみの時間が設けられています。6年生では、子どもたちが好きな絵本の読み聞かせだったり、魚釣りやキャッチボールなどの中から二者択一を設定し、子どもは自分の顔写真を希望する活動の下に貼るようにしています。結果は多数決で決まりますが、自分の希望が通らないからと言って怒り出す児童もおらず、民主的かつ粛々と活動が展開されていました。子どもたちがここまで気持ちの切り替えができるようになるには、きっと根気強い指導が必要だったと思います。

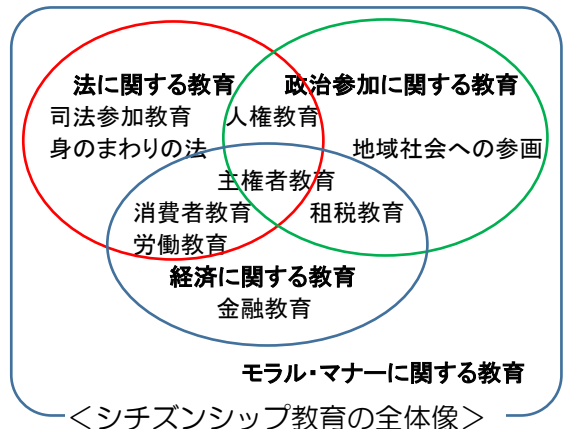
神奈川県では、キャリア教育の一環としてシチズンシップ教育に取り組んでおり、昨年(令和元年)7月には、全県立特別支援学校の高等部で模擬投票が行われました。政治については小学6年生で初めて学ぶことになり、高等部に入学すると本格的に選挙体験学習や模擬選挙が始まります。新学習指導要領に則って、その学習に向けた取り組みが、こうして小学部の段階から積み上げられており、子どもたちの成長をとてうれしく思います。



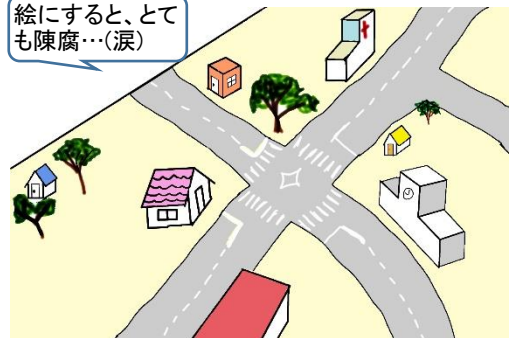
### ★投票で施設を決め、自分たちの理想の街を作ろう！

以前、高等部では自分たちの理想の街作りという、とてもワクワクするようなテーマで授業が行われていました。この授業はシチズンシップ教育の3領域の1つの政治参加に関する教育(旧 政治参加教育)につながるものでした。

授業の内容ですが、約1m四方の図面に自分たちの家を設置し、スーパー、交番、病院など、各自が置きたい施設を考えて2人ずつプレゼンし、それを聞いた他の生徒ら全員で投票します。投票によって施設が決まったら、実際に配置して街作りをしていくという内容です。“安心できる街作り”や、“医療体制の充実”などといった抽象的な政治政策を具体的な街作りとして可視化することは、この授業の最大の売りの1つであり、生徒の実態に応じた工夫の好例でした。また、投票は別室に投票所を設置して模擬投票さながらの臨場感で行われました。そして、授業数回にわたって投票を繰り返していくので、日を追うごとに街が豊かになっていきます。昨今人気のあ



絵にすると、とても陳腐...(涙)



つまれどうぶつ森などのコミュニケーションゲームを思わせるような展開に、生徒はとても意欲的に授業に参加していました。完成していく街はみんなの目に触れるので、授業を受けていない生徒たちも、興味津々で出来上がっていく街に注目していました。

ここでは実践のほんの一部しか記載していませんが、設置しようとする施設はどれも街作りにとって必要なものでした。しかし、自分にとっての優先順位を考えて投票することや、他者の意向が反映されて設置した施設でも、新たな有益性の発見や街の魅力につながったりすることがあったようです。

また、私が注目したことの1つに、非言語的コミュニケーション活動の要素があります。グループで1つの作品（街）を作るという過程によって、例えば、「自分としてはコンビニをここに置きたいけど、投票で決まったから仕方がないか。」というように折り合いをつけることが必要になります。自分の意向とメンバーの意向をどのように尊重するとよいかバランスを考え、時間をかけて街をまとめ上げていくことは、対人関係スキルを養う上でもとてもよい機会になっていたと思います。1つの授業にこうしたねらいが無理なく含まれていることに大いに感銘を受けました。指導案『理想の街を作ろう』は校内教材フォルダに保存されています。

ちなみに、海外における Citizenship Education は、小学校教育の段階からかなり踏み込んで取り組まれているようです。その一端が、2019年の本屋大賞ノンフィクション本大賞を受賞した右の文献『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』に紹介されており、イギリスの Citizenship Education のエピソードが記されています。シチズンシップ教育のあり方を考えるきっかけとしても参考になりますので、ぜひご一読ください。



### ★ピグマリオン効果について考える

ピグマリオン効果とは、教師が伸びると期待して子どもに接すると、その子どもの成績は期待されない場合に比べて伸びやすいと言われる効果のことで、別名教師期待効果とも言われます。最近、ある先生と話をしたときに、このことについて改めて考えさせられました。その先生は、いつも「**先生、Aさんすごく伸びてますよ。伸びしろがたくさんありますから。**」と、私に嬉しそうに声をかけてくださいます。そこからほほえましいエピソードになったりもするのですが、子どもの成長をととても期待されているのがよく伝わってきます。

一方で、他の学校を訪問したときのことで、その学校の先生が、クラスの課題のある生徒に対して厳しく指導を繰り返していました。話をお聞きすると、対応にととても苦慮されており、何とかしたいという思いからつい厳しく接してしまうという苦しい胸の内が語られました。しかし、そのような気持ちのままでは、状況は改善されないばかりか、生徒との関係は悪くなるのが危惧されました。

これらのエピソードを比較すると、肯定的な期待をもって子どもに接すれば、その期待を実現しようとする心理が働いて、色々工夫をし始めるようになると思いました。ピグマリオン効果については批判もあるようですが、子どもに肯定的な期待をかけて接することは、子どもにとっても自分の行動(指導)にとってもよい影響を与えたいと思いました。逆に、どんなよい手立ても、子どもに肯定的な期待をせずに行えば、その心理が働いて結局上手くいかなくなる恐れがありますので、注意が必要です。

<参考文献>

神奈川県教育委員会 2020 「シチズンシップ教育」 指導用参考資料  
プレディミカコ 2019 『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』 新潮社